

林 宥一著

『「無産階級」の時代』

近代日本の社会運動』

評者：梅田 俊英

本書は、荒川章二、林宥一らによって1990年に発足した「近代日本社会研究会」による研究の産物のひとつである。「シリーズ 日本近代からの問い」の一冊として本書は刊行された。ソ連が崩壊し、20世紀が終末を迎えるにあたって、「現在がどこにあり、どこに向かっているのか」への関心は強まっているが、歴史と未来に対する不透明感がひろがっているなかで、「日本近代からの問い」シリーズは刊行された。まず、歴史から現代を照射しようとする視点を評価しておきたい。

本書は、そのシリーズ第4冊目の著書である。本書の構成は以下の通りである。

第1章 階級社会状況の成立

第2章 無産階級論の諸相

第3章 無産階級運動の構造

第4章 階級の成立と地域社会 - 労働・農民運動組織化とその影響

ところで、本書の著者林宥一は、1999年8月、本書脱稿の準備中に急逝された。哀悼の意を表したい。そのような事情で、本書は「近代日本社会研究会」のメンバーの一人である安田浩によって編集がなされた。その経緯は、本書の安田「編集解題」に述べられている。それによれば、第3章半ばまでは著者の原稿はほぼできあがっており、第4章は既成稿によって本書は形成された。すると、第3章後半が完成しておら

ず、そこで編集者によって著者のいくつかの既刊論文から各部を抜き出し編集されて、本書は完成したのである。

そのせいか、本書第1章、第4章は著者の主張が鮮明で共感できる部分が多々あったが、第3章はいささか食い足りないと感じさせた部分もあった。本書の内容を検討しよう。

2

まず、第1章では「無産階級」という用語について検討されている。この用語は、だれでも知っているように、現在は死語にあたる。これは「両大戦間期に特有の歴史的用語」だったのである。つまり、「第1次世界大戦後における「無産」や「階級」という文字の氾濫は、所有（有産）と非所有（無産）の懸隔が同時代の人々の生活と意識にきわめて重要な位置を占めていた」（22頁）のである。評者も、両大戦間期の社会運動の勃興を重視してとらえる一人である。「日本近代からの問い」はまさにそこにある。著者が「「階級」は、この時代の人々にとって観念や理論以前のものだった。それは、何よりも眼に見える衣食住の生活全般の問題であり、職業や居住地の差であり、さらには体格や顔や手のちがいや、心理・感情・趣味・娯楽の差をもたらすものであった。これらすべての差異を総合するものとして「階級」という言葉があった。つまり「階級」は何よりも即自的で、実体的・可視的な概念だった」（24頁）と賀川豊彦に即して総括される著者に大いに共感を覚える。このような立場から著者は日本資本主義論争にも若干言及される。それには旧来の論争史にはない、「肉声」の言説を聴くことができる。労農派などは「資本主義化の必然性という方向でのみ考えられており、農業・農民問題の独自性・特殊性を認識するという視点はなかった。それゆえ、彼らにとって小作農民問題は、

本質的には労働問題のうちに一体化されるべき性格のものであった」(40頁)という。おそらく、この批判で分かるような視点が著者のもっともベースとなるものといえよう。つまり、農業・小作問題の特殊性と、そこから生じる農民運動の独自性を重視する視点である。本書への、小作農の子たる評者の個人的な共感はそのから来るのかもしれない。

第2章において、山川均、大山郁夫、吉野作造、長谷川如是閑の無産階級論が検討されている。山川においては、労働運動と農民運動との同質性を「ことのほか強調」(48頁)するものとして批判されている。その上で、如是閑においては「民衆の心性に最も近づきえた思想家」(74頁)と高く評価されている。ただ、如是閑の社会運動への具体的接触・関与が山川、吉野、大山らと比べて「最も希薄」(73頁)だったかどうかには、異論がある。大山が香川県から出馬したときの応援活動は言うまでもなく、1930年『批判』刊行前後の如是閑もかなり実践的ではなかっただろうか。この頃、如是閑は唯物論研究会の会長に推されている。彼の身近なところに当時共産党に入党した柳瀬正夢がおり、左翼知識人とのルートがそれなりに存在したと思われる。33年末、如是閑は「共産党資金として百余円を提供した嫌疑」で検挙されている(拙著『社会運動と出版文化』参照)。これは、特高のねつ造ではあったであろうが、当時の如是閑が左翼にかなり近いところにいたことは疑いない。

第3章では、主として農村社会運動と都市社会運動について検討されている。このなかで、ひたすら強調されるのはその両者の差異である。「大衆民主制の農村的形成 = 農村民民主義との比較でみると、1920年代の都市民主主義・産業民主主義形成の歴史的動力は脆弱であった」(127頁)と評価されている。ここまで、明

瞭に言い切れるかどうかはおいておきたいが、実感としては首肯できる面がある。小作農と労働者の存在形態に一般的な差異があったことに賛成するからである。つまり、農民は「職住一致」の存在で、平たく言えば、紛争や争議が起こっても逃げも隠れもできない人々であった。小作料値下げ要求はまだしも、20年代に頻発した「立禁」への反対、土地取り上げへの抵抗は深刻なものであったのである。それに比べれば、「労働者」は職を辞めればただの人となる存在といえよう。

第4章において、労働・農民運動が組織化されていく過程とその影響について検討されている。そのなかで、労働者においても「下層社会」に閉じこめられていた存在から「国民の一員たる諸権利への自己主張を強め」(166頁)ていくとされている。それにもかかわらず、「地方自治への影響と関与度は、農民運動勢力の方が労働運動のそれよりもはるかに大きく深かった」(171頁)ことが強調される。こうして、この2つの運動は「異質性を内包し、二元的構成」(200頁)を持っていたとされつつも、なお「無産階級」という用語が氾濫したように「所有と非所有」の区別が同時代の人々の生活と意識に重要な位置を占めていたと結論されるのである。

3

労働運動と農民運動の差異についての指摘は著者も論究されているように、既に西田美昭氏らによって提起されていることである。本書の独自性はそれに基づきつつ、その差異を社会構造分析の上で検討しようとしたところにある。とはいえ、農村社会構造だけでなく、20年代労働社会の構造分析をもおこなえば、別の面が見えてくるかも知れない。20年代は小作争議が頻発しただけでなく、中小労働争議が頻発し

た時期でもあった。大原社会問題研究所によって刊行されたマイクロフィルム版の協調会資料『日本社会労働運動史料集成』（柏書房より2000年9月刊行）に含まれる、協調会労働課ないし情報課によって克明に中小「労働争議」が記録された文献などを検討すると、何らかの新たな歴史像を再構成できるかも知れない。本マイクロフィルムには紡績・製糸工場は言うまでもなく、製材、印刷、自転車部品、硝子、新聞販売店その他ありとあらゆる業種に発生した労働争議の記録が収録されている。従来よく知られた

野田争議、浜松楽器争議などだけでなく、膨大な中小業種の労働争議・紛議について分析を加える必要がある。とはいえ、著者は既に他界された人である。それは残された我々のなすべき課題と言わねばならない。

（林宥一著『「無産階級」の時代 近代日本の社会運動』青木書店、2000年6月、239頁、定価2,300円）

（うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所兼 任研究員）

法政大学大原社会問題研究所叢書 ◯好評発売中◯

証言 産別会議の運動
●占領期の日本労働運動史・労使関係史の基礎資料
 法政大学大原社会問題研究所編 A5判・三九〇頁・六五〇〇円
 産別会議の運動家の証言から産業民主主義の展開や経済再建との関連を視野に入れた労働運動史・労使関係史の解明。

証言1 印刷出版労組の結成と運動……杉浦正男
 証言2 電産一〇月闘争と電産型賃金……足立長太郎
 証言3 新聞単一の結成と二・一スト……川添隆行
 証言4 産別民同がめざしたもの……三戸信人
 証言5 経済復興会議の組織と運動……中原淳吉
 証言6 三菱重工下丸子労組の結成と活動……山崎良一
 証言7 日特管労組の活動と城北労協の結成……小林栄一郎
 証言8 労働戦線の創刊……佐藤茂久次・松尾洋

現代の韓国労使関係
●日・韓の工業化・近代化の時期と速度の違いを踏えた比較研究
 法政大学大原社会問題研究所編 A5判・三六〇頁・六二〇〇円
 企業別から産業別組合形成をめざす韓国労使関係を「民主労総」等の調査を踏え法改正・労働市場・産業構造等多面的に分析。

政党政治と労働組合運動
●革新政治と労働組合運動の今日的課題を提示
 五十嵐 仁著 戦後日本の到達点と二十一世紀への課題
 A5判・四六〇頁・六〇〇〇円

社会運動と出版文化
●「社会史」の方法から見た社会運動史
 梅田俊英著 近代日本における知的共同体の形成
 A5判・三六〇頁・五〇〇〇円

近代農民運動と政党政治
●普通選挙の実施という新たな政治条件下の農民運動
 横関 至著 農民運動先進地香川県の実態
 A5判・三三〇頁・五〇〇〇円

御茶の水書房 〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
<http://homepage1.nifty.com/ochanomizu-shobo/> ▶価格は税別◀